

3-3. 新潟県妙高市（新潟県妙高市）

(1) 地域の概要

1) 妙高市の概要

【人口】

34,629人(男 16,874人 女 17,782人 H26年10月31日現在)

【地勢】

妙高市は、新潟県の南西部に位置し、新潟県上越市、糸魚川市、長野県飯山市、長野市、北安曇郡小谷村、上水内郡信濃町に接している。市内の西部には百名山の秀峰妙高山に代表される標高2,000～2,500mの山岳が峰を連ね、裾野には広大な妙高山麓の高原丘陵地帯を形成し、北東部には高田平野が広がり日本海へと続いている。また、妙高連峰に源を発し、中央部を貫流し日本海に流下する関川をはじめ、渋江川、矢代川など大小の河川は肥沃な扇状地を形成し、北部には優良農地が広がっている。妙高山麓一帯は上信越高原国立公園に属し、雄大な自然景観と四季折々の変化に富み、湧出量の豊富な温泉や多くのスキー場を有する観光地となっている。

【面積】

445.52㎡（東西に33.7km、南北に30.1km） 新潟県土の約3.5%

【気候、自然】

気候は、日本海側特有の気候で、夏季は高温多湿、冬季は大陸からの季節風により、たいへん雪の多い地域ですが、降雪による豊かな水資源と緑豊かな自然環境に恵まれた、色鮮やかな四季の変化に富んだ美しい地域である。

【歴史】

2005年（平成17年）4月1日新井市に中頸城郡妙高高原町ならびに妙高村が編入合併し「妙高市」へと改称した。

【観光】

妙高市は、妙高山麓の大自然に抱かれた国立公園妙高と広大なスキー場が広がり、そこから湧き出る5つの源泉が7つの温泉郷をつくりあげ、さらに、ここで生まれ引き継がれてきた風土や風光明媚な景観などの豊かな観光資源を有している。グリーンシーズンには日本百名山の妙高山や火打山への登山や森林セラピーロードを活用したトレッキング、また、主要観光産業であるスキー観光では入込客数が減少傾向にあるものの、近年、海外からのインバウンド旅行者が増加傾向にある。なお、1月20日に開かれた中央環境審議会において上信越高原国立公園から当市域が属する妙高・戸隠地域が分離独立し新たに「妙高戸隠連山国立公園」の誕生が決定し、また、3月14日に迫った北陸新幹線上越妙高駅の開業を更なる契機とした観光振興策が必要となっている。

2) 地域資源の概要

①観光資源

- ・日本百名山：「妙高山」「火打山」「高妻山」
- ・日本の滝百選：「苗名滝」^{なえなたき}「惣滝」^{そうたき}
- ・平成の名水百選：「宇棚の清水」
- ・森林セラピー基地認定（H20. 4月）：森林セラピーロード6カ所
- ・妙高高原温泉郷（7・5・3の温泉）：
 - 7つの温泉地（赤倉・新赤倉・池の平・妙高・杉野沢・関・燕）
 - 5つの源泉
 - 3つの湯色（乳白色・茶褐色・透明）
- ・8つのスキー場：赤倉、池の平、妙高杉ノ原、関、斑尾高原など

②文化・歴史

- ・斐太遺跡群（S52 国指定）^{ひだ}
- ・観音平・天神堂古墳群（S53 国指定）
- ・鮫ヶ尾城跡（H20 国指定）
- ・旧関山宝蔵院庭園（H25 国指定）
- ・関山神社 仮山伏の棒使いと柱松行事（H25 県指定）

③安全・安心な食

- ・笹ずし・笹箕ずし
- ・加工食品（「かんずり」など）
- ・日本酒（3つの酒蔵）
- ・大葉の無農薬ミスト栽培
- ・妙高ゆきエビ（淡水養殖）
- ・妙高雪国どじょう（棚田での養殖）
- ・クラインガルテン妙高（滞在型市民農園）
- ・道の駅あらい（新井ハイウェイオアシス）
- ・妙高山麓直売センター
- ・旬の山菜やとまとをはじめとした高原野菜

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

妙高市は平成 17 年度に旧新井市、旧妙高高原町、旧妙高村が合併し誕生いたしました。合併に際し何よりも大切にしたのは地域の人々に親しまれ観光地としての名の通った「妙高」という名称でした。以来、人と自然が共生しすべての生命を安心して育むことができる「生命地域の創造」をまちづくりの基本理念に掲げるとともに、上信越高原国立公園内の「国立公園 妙高」を旗頭に環境の保全との賢明な利用の中での地域振興に向けて、市民が力を合わせまちづくりを行ってきました。

また、上信越高原国立公園からの分離独立が決定し新たに誕生する「妙高戸隠連山国立公園」のほか平成 27 年 3 月 14 日には北陸新幹線が開業することから、さらなるエコツアー活動の充実を図ることが、地域の活性化と交流人口の拡大につながっていくものと考えている。

2) これまでの取組

これまで豊かな自然環境を守り継承していくことや、地域資源を活用した観光地としてのイメージ向上を目的として、自然環境の保護・保全活動や健康をテーマとした市民参加型イベント「エコ・トレッキング」を開催してきました。ここまで当地域のすぐれた自然環境を伝える中で、市民の自然に対する保全意識の高揚につながり一定の成果が出ていると考えておりますが、宿泊や連泊などに結びつかない等、観光関連事業者や農家など多方面に経済的な波及がおよばず、提供するエコツアーの商品化等が課題となっている。

3) 今後の課題

- ・新国立公園を中心とした観光・自然資源の磨き上げと再評価
- ・自然歩道や登山道の整備と多様な活用
- ・高山植物の保護や特定外来生物の駆除など自然環境の保全
- ・妙高特有の魅力ある自然景観の保全と形成
- ・インストラクターやガイドの育成
- ・エコツーリズムに関連する若者の雇用の創出
- ・関係機関や関係団体による保護・活用に関する横断的な組織の設置など

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 27 年 1 月 10 日 (土) ～11 日 (日)
場 所	新潟県妙高市
アドバイザー	東京大学大学院 下村 彰男 氏
参加者	妙高市役所職員他 合計 9 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光資源について説明 ・視察：道の駅あらい、関山神社、妙高山麓直売センターとまと、北国街道（新井宿～小出雲～二本木～関山宿～田切～関川宿） <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：赤倉温泉スキー場、赤倉観光リゾートスキー場、赤倉観光ホテル

(4) アドバイスの内容

1) 妙高市の取組内容の説明

DVDによる観光資源説明／妙高市観光PR用DVDによる説明



妙高市観光PR用DVDによる
観光資源説明



妙高市の取組み説明

2) 現地視察①



上越妙高駅 東口エントランス
「もてなしドーム」



上越妙高駅「光のテラス」から妙高山を望む



道の駅あらい 農産物直売所



北国街道 関山神社境内

3) 現地視察②



赤倉観光リゾートスキー場



赤倉観光ホテル
ホテルの歴史について支配人より説明

4) 斑尾高原観光協会の取組内容の聞き取り

会場／斑尾高原観光協会 山の家

観光協会などで実施しているアクティビティについての説明。

下村：森林セラピーなどのトレッキングガイドはどうなっている。

地域：ペンションのオーナー約30人によるトレッキング委員会が対応している。

下村：様々なアクティビティを実施しているが、人気があるのは何か。

地域：グリーンシーズンはトレッキングよりもラフティング、ジップライン、ツリーイングが人気である。これからは雨天時や子どもたちに対応した事業を増やしたいと考えている。

下村：最近では観光が変わってきている。リアルタイムの情報提供が必要。別府ではPRのためのNPO法人がある。ここではいかがか？また、新たな取組はないか。

地域：PRはパンフレットや観光協会HPで行っている。新たな取組としては「斑尾パスポート」を購入すると26種類のアクティビティの中から好きな組み合わせ

で1日楽しんでいただけるようになっている。

オーナーの皆さんは、ほとんどが都会から来られた方なので様々な情報や知識を持った方がおおい。いろいろな発想が生まれてくる。

下村：地域の課題は？

地域：ペンションオーナーの世代交代や廃屋が問題となっている。

オーナーは2代目が継ぐというより、別の方が新たなオーナーになるパターンが多い。

下村：廃屋は処分できないのか。

地域：持ち主が処分することになっており手が出せないのが現状。



斑尾高原観光協会での聞き取り



山の家 2階から飯山市を望む

5) 妙高高原ビジターセンターの取組内容の聞き取り

会場／妙高高原ビジターセンター

主に妙高高原ビジターセンターが主催しているイベント内容についての説明

地域：施設は建設から31年経過している。建物が狭いため各種イベントは20人を限度として行っている。周辺には100種類の野鳥がいるためバードウォッチングを実施している。高齢者のリピーターが多い事業である。また、子たちを対象としたキッズ探検隊のようなものを実施したいと考えている。館長となって間もないが、VC自体の市民に対する知名度が低いような気がする。市内小学生が総合学習で使用されているが、地域全体で盛り上げていかなければと考えている。友の会のようなものを組織し楽しみながら盛り上げていきたい。

下村：冬のイベントでスノーシューはどこで、どのような内容で実施しているか。

地域：主にアニマルトラッキングで動物の足跡をたどっている。会場はいもり周辺で実施している。

下村：大毛無などでやる場合は内容が変わるか。

地域：基本的には変わらないが、スタッフの人員に限りがあるため、池の平周辺でのイベント実施となってしまう。看護大は大毛無でセラピー効果の学科で使用している。

6) 講評検討会

会場／妙高高原メッセ

下村アドバイザーより近年のエコツーリズムについて説明

①「交流自立型まちづくり」の方向性

ア. 地域資源を活かすための発見が必要。

- ・ **自律（自立）型**…地域コミュニティの再生・自立、住民主体のまちづくりの推進。

地域（生活様式・風景等）が均質化傾向にある → 主な要因としては「ひと・もの・かね・情報」の流動の広範化及びスピード化。

それによりアイデンティティ、地域コミュニティの拠り所の喪失、コミュニティ意識の希薄化という結果になっている。それを回復させることが地域コミュニティの再生・自立につながる。

- ・ **交流型**…交流促進（観光振興）来訪者（地域外者）との協働

観光客の楽しみ方（観光志向）の変化が見られる → 要因としては観光の「形態」「資源」の変化によるもの

これまでの観光形態は主に「周遊型」であった。移動しながら優れた資源（景観等）そのものの非日常性を受動的に楽しむことが主流であった。しかし近年は一箇所に長期滞在し、景観と地域の自然や歴史・文化との関係を能動的に楽しむ「滞在・滞留型」へと変化してきている。

②行政の関連動向

2004年に「景観法」が、2008年には「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（歴史まちづくり法）が公布、2004年には文化財保護法が改正され、文化財をより広く総合的にとらえ、かけがえのない文化遺産として地域社会の発展や観光振興に積極的に活用しようとする動きに変わってきている。

- ・ 美しい国づくり政策大綱（2003年）
- ・ 景観法（2004年）
- ・ 歴史まちづくり法（2008年）
- ・ 文化財保護法の改正（2004年）
- ・ エコツーリズム推進法（2007年）

③新たな観光志向が求められる「資源」

- ・ 観光資源とは以下の両者が一体化したものである。

「記号」・・・各地域の個性的な風景、料理、祭り等

「意味」・・・個性を形成し支える独自の生活様式（文化的アイデンティティ）

日本の各地には多様な風景・景観や料理等があり、資源性に富んでいる。それら「記号」を通して、それを支える生活様式「意味」が求められている。

④地域の個性について（風景・景観を例に）

- ・文化的景観への関心は世界的。ヨセミテ州立公園やイエローストーン国立公園のような自然的景観の保護を目的に1972年にユネスコにて世界遺産条約が採択された。また、1992年から文化的景観ジャンルが設けられた。（アジアの棚田、欧州のブドウ畑 等）

⑤エコツーリズムの目的（目指すもの）

- ・「地域（自然）環境」への負荷が小さく、持続的な保全管理に貢献する
- ・「来訪者」に豊かな観光体験と、自然・地域に対する認識・理解を提供する。
- ・「地域住民」の地域への帰属意識を高め、経済面での支援を行う

⑥新しい「たび」の形

- ・周遊型の旅行 ⇒ 滞在・滞留型へ
- ・「たび」とは、他日（非日常）、他火（食事の違い）を楽しむことができるものである。
- ・情報社会の「たび」
- ・地域を知ることの楽しさを伝える仕組み
- ・ガイドによる情報伝達をはじめとするガイドランスの工夫が必要となる。

⑦新しい「自然保護」の形

- ・人為の排除による静的な自然保護
- ・適正な利用を前提とし、モニタリングを組み込んだ、動的、順応的な環境管理による自然保護
- ・自然保護には2とおりの考え方がある。

⑧新しい「地域運営」の形

- ・たびびと（域外からの来訪者）との協働による地域づくり（地域運営）へ
- ・{地域（自然）環境 ⇔ 地域住民}

↓

{地域（自然）環境 ⇔ 地域住民 ⇔ 来訪者 ⇔ 地域（自然）環境}の新しい「地域運営」の形へ。

- ・来訪者からは精神的支援、労働支援、経済的支援などが期待できる。

⑨エコツーリズム推進の課題

- ・インタープリテーション技術の向上とプログラムの開発
- ・環境負荷に対する知見と対応策の検討
- ・地域の運営・管理費用に対する受益者負担の仕組みの開発
- ・来訪者を受け入れる体制の核づくり
- ・様々な地域情報の収集と発信の検討
- ・地域個性の明確化（資源化）

⑩新たな「観光」の形成（目標）

新たな観光の計画論〔魅力づけ（文化アイデンティティ）、中核組織（担い手、財源の確保等）〕

- ・周遊観光（移動・立寄り） → 滞在型観光（滞在・滞留）
- ・非日常型資源（優れた資源） → 非日常型資源（生活様式）
- ・立寄り客（賑わい） → 準（第二）住民



講評検討会の様子



講評検討会の様子

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

- ・妙高市における観光資源及び環境資源の再確認
- ・環境、観光部門及び農林部門のなど市役所内での連携の必要性

②今まで課題としていたことがより明確になった

- ・妙高市の全体としてのエコツーリズムに係る計画をはっきりさせること
- ・計画についてはコンサルタントなどを活用し様々な知見からまとめることの必要性

③今までの課題に対して取組方が分かった

- ・妙高市のシンボルである妙高山とそこに住む人たちとのかかわり、北国街道や修験の山としてのプログラムづくり
- ・妙高山（景観）→ストーリー付け（個性・味覚） →地域で共有

④今までとは別の課題が明らかになった

- ・上越妙高駅での情報発信
- ・上杉や鮫ヶ尾城など歴史をキーワードとした上越と絡ませた取組
- ・目的にあった妙高市らしさが伝わるプログラムのコーディネート

⑤その他

- ・妙高市における雪との付き合い方
- ・雪の使い方（それ自体が生活文化）

2) 今後期待される効果

- ・新国立公園の誕生決定により、妙高山をはじめとした新たな活用面でのきっかけづくりとなった。
- ・観光振興における妙高山や火打山、雪などさらなる観光資源の活用
- ・自然環境を地域で守ることの意識の醸成

3) 今後の取組

- ・新国立公園の誕生を冠とした記念イベントの実施
- ・新国立公園の自然環境の保護と活用を推進する運営組織の立ち上げ
- ・自然環境の保全を目的とした、市民参加による希少動植物の保護、外来生物の駆除に関する活動の実施

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

1) 参考となった事項

- ・妙高市に存在する多様な観光資源、自然資源の再確認
- ・妙高山と地域住民との生活のかかわりを外部へ伝えることの必要性
- ・エコツーリズムと妙高市の基本理念である「生命地域の創造」とのつながり

2) その他感想

- ・普段あたりまえのように目にしている妙高山や妙高の自然・景観であるが、訪れる方にとっては、それを見ることや、そこに根付いた生活習慣、郷土料理などに触れることを目的に訪れることが多い。そのため再度、妙高市にある地域の個性を収集し明確にしておく必要があるのではないかと感じた。また、その後の情報を的確に発信する仕組みについても、見直しが必要だと感じた。
- ・エコツーリズムが自然観光資源に触れ、自然の成り立ちなどの知識や理解を深める活動というイメージが強かったが、その地域の人々の暮らしや歴史文化も絡めていく必要があるということを教えていただいた。
- ・非日常を求めて来られる旅行者に対し、受入れる側が地域の特性や個性を解説し、感動を覚えてもらうことで、経済行為として成り立っていく。そのために、地域の人々が自然環境の保全や昔ながらの生活習慣、歴史文化を尊重し守っていく活動に繋がれば好循環のサイクルとなることも理解できた。
- ・新国立公園の誕生が決定し、今後エコツーリズムの充実を図っていくうえで今回のアドバイザー派遣事業は有意義であったと考える。エコツーリズムの実践が「環境保全」「観光振興」「地域振興」「歴史文化の保護」につながることを意識し、市内関係者や近隣市町村とも情報交流などの連携を図りながら「妙高戸隠連山国立公園」を中心としたエリアを盛り上げるための取組を進めていきたい。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

東京大学大学院 下村 彰男 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

エコツーリズムを市政の柱の一つとして設定しようとしており、具体的な動きとしても、後述するように「エコツーリズム推進基本計画」「妙高ビジョン」「第二次妙高市総合計画」等を検討中である。

②課題

検討を役所の内部で進めており、地域の関係者を巻き込んで検討を進めることが重要である。協議会の設置はもちろんのこと、全体構想の具体的な策定作業においても、地域の関係者の適切な参加を検討する必要がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ・妙高山
- ・産物をはじめ、地域資源の多様性

②上記地域資源に魅力を感じた理由を書いてください

- ・妙高山は、越後富士と呼ばれるように、その形状は秀麗で、妙高市はもちろんのこと周辺地域からも広く目にするのできる地域のシンボルである。
- ・また、地域の農産物生産を支えている水の多くは妙高山を源流としており、関川や矢代川などを通して供給されている。
- ・米を中心に農産物に恵まれているだけでなく、海にも近いことから海産物もあり、温泉も豊富である。そして、歴史・文化の側面でも北国街道、修験、近代スポーツ、芸術関係と、妙高市を語る資源が非常に多様であり、これらも多くは妙高山に結びつけることができる。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・観光をまちづくりに活用することの意義について
- ・地域の資源、地域の個性について
- ・エコツーリズムの考え方や概念について
- ・エコツーリズムを進めるうえでの課題について
- ・特に、担い手や財源の問題について

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

- ・現在、妙高市役所内に関連部署からの代表を委員とする「エコツーリズム推進本部」を設置しており、「エコツーリズム推進基本計画」を検討している。
- ・また妙高戸隠連山国立公園の分離独立を契機に振興を図るための「妙高ビジョン」についても検討を進めている。
- ・その他、2015年度からの「第二次妙高市総合計画」においてもエコツーリズムを重要な柱の一つと位置づけており、これも年度内策定に向けて検討中である。

②全体構想への意向について

- ・上記の諸計画をもとに、全体構想を検討・立案する意向がある（と判断した）

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

- ・エコツーリズム推進協議会の設置
- ・地域で共有する、目標像・コンセプトの再検討

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・エコツーリズムを組み立てていくうえでの地域資源は非常に豊富であると考えられる。
- ・妙高山は姿も認識し易く、実際、市内はもちろんのこと周辺地域からも、よく見ることができ、地域のシンボルとなっている。そして、新井からは「はね馬」と呼ばれる雪形が見え、春を象徴する風物詩になっているなど、人々の暮らしとも結びつきが深い。
- ・また、関山神社、宝蔵院に代表される、妙高山に関わる信仰や修験の歴史・文化も、地域には蓄積されている。
- ・妙高山を源流とする河川や流れは、関川や矢代川へと流れ込み高田平野を潤し、古くから穀倉地帯を支えてきた。「いもり池」がそうであったように、農業用水に関わる権利や管理の歴史についても、妙高山と麓の農業地帯とを結につける資源になるのではないか。
- ・妙高山は、もっぱら「見られる対象」として捉えられているが、赤倉を終焉の地とした岡倉天心は「東洋のバルビゾンに」という構想を持っていたわけで、中腹から眺める農地・農村の風景も美しかったと想定される。現在の観光写真でも「農地と妙高山」を写したものが少なからずあり、妙高山を単体として資源とするのではなく、裾野における人々の暮らしや営みと一体化した「姿」を地域資源とすることを検討した方がよいと考えられる。
- ・上記を考えると、農地と妙高山（森林等）の間の集落部の景観・風景を整えていく必要がある。地域における建物の形態や様式、集落形態、そしてそれらに関わる生活様式（雪との関わりを含）に関する知見をもとに、建物や集落の風

景・景観について再検討する必要があると考えられる。

- また、近代スポーツとしてのスキー（リゾート）の歴史についても、赤倉温泉スキー場、赤倉観光ホテルなどを通して地域にストックされており、こうしたスキー場等も妙高山と地域の暮らしとの関係史の一環として扱える可能性がある。
- この他にも、温泉、北国街道、上杉氏等々、地域資源の素材は豊富である。これらは現時点では断片的に提示されるに止まっており、これらを相互に結びつけ、「妙高（市）」を特徴づけたり、地域の物語として伝えるような「地域資源」にまで昇華されているとは言い難い。
- エコツーリズムを展開し、核としての数々のエコツアーを設定していくためには、明確な地域像としての目標を検討し、地域で共有する作業が必要であると考えられる。
- また現在のところ、諸計画の立案について役所を中心に検討を進めているが、計画系のコンサルタントに依頼したり、アドバイスを受けたりした方が良いと考えられる。そして、可能であれば、地域（新潟県等）に対する造詣の深い計画系の専門家に、頻度高く（折にふれて）相談できるように、「アドバイザー」といった存在の設定についても検討した方がよいと考えられる。